市姫転生譚

かなめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
市姫転生譚

【Ｎコード】
Ｎ７６１４Ｕ

【作者名】
かなめ

【あらすじ】
戦国時代の美女と呼ばれたお市が現代に生まれ変わった！？　転校生と幼馴染みの間で揺れる主人公。恋の行方はいかに！　別サイトにて連載中。のんびり不定期更新です。

01.

あの方とは政略結婚だったけど、互いに愛し合い、子にも恵まれ、毎日が満ち足りていた。あまりにも酷い最期の別れは私には重すぎたけれど、きっとまた逢える。そう信じていた――。

ピピーと鳴る目覚まし時計を止め、起き上がる。

「今日も変な夢を見た」

とても幸せそうに微笑む私と知らない男性が仲睦まじい映像が流れる。十六歳の誕生日を迎えてからというもの、半年間毎日のように同じ映像を夢に見た。しかし、毎度相手の顔は思い出せない。結局誰なのかわからないままだった。

「市子ー。起きなさーい」

母の呼ぶ声がして、私は学校へ行く準備をした。

普段と変わらぬ日常風景だった。

大抵、私がゆっくりと準備をしていると、幼馴染みの吉次郎が迎えに来る。彼には彼女が何人もいるはずだが、毎朝必ず私を学校まで送ってくれるのだった。

「市子。いつも通りかわいいな。俺の彼女になって欲しい」

「うん、ごめん。おはよう」

吉次郎は嫌いじゃないけど、絶対に恋愛対象になったりしないということは確信していた。

「相変わらず、冷たいんだね」

「彼女はいいの？」

私が聞くと、いつも曖昧な返事をして誤魔化す。これも今さらなので深いところまで問いただしはしないが。

学校まで来ると、吉次郎は違う学校なので校門で別れる。教室へ入ると、何だかいつもより騒がしい。クラスの子が転校生が来るらしいと教えてくれた。

私の学校は女子校であるから転校生といっても、女子であることに違いないが、これほど騒がしいのはきっとよほどの名家か美人なのだろう。私には全くもって興味がない。

「皆さん、すでにご存じでしょうが、転校生を紹介しますよ」

担任が隣に立つ少女を紹介する。彼女は微笑むと、私の方を見た。私は彼女と目があった瞬間、頭の中が真っ白になって何も分からなくなるくらいの衝撃を受けた。

何の因果か彼女は私の隣の席だった。名前も名乗っていた気がするが、はっきりとは思い出せない。確か、政巳と言ったか、男のような名だと思った。

その日の放課後、彼女――政巳に話しかけられた。一緒に帰らないかと言うことだった。吉次郎が迎えに来そうな気もしたが、今日は政巳と一緒に帰りたい気分だった。自分が彼女に感じたモノが何なのか知りたかっただけだったかもしれないが、単に仲良くなりたかっただけだったかもしれない。

私たちは町を一望できる丘の上の公園に着いた。

「あの」

政巳が初めに口を開いた。

「私と目が合ったとき、何か感じませんでしたか？」

私がうなずくと、政巳はふわりと笑った。

「やっぱり……、やっと見つけた」

そして、突然抱きつかれて、うろたえた。でも、どこか懐かしいような匂いがした。

「市、あなたは私を忘れてしまったのですか？」

政巳に真っ直ぐ見つめられ、見つめ返すことしかできない。

記憶の欠片を集めてみると、ある人によく似ていた。夢の中で私の隣にいた彼だ。そう思った瞬間、鮮明に思い出した。

「長政さま？」
聞くと、政巳は心底嬉しそうに微笑んだ。私の目からは涙が溢れ、止まることを知らなかった。

しばらく泣くと、私も平静に戻り、落ち着いた。それから、あることに気づいた。
「長政さま、今、女性ではないですか。どうして？」
現世では一緒になれると思っていたのに、これではまた、来世まで待たねばならないのかと私の気分は落ち込むばかりだ。
「私は男ですよ」
頭をつかんだと思うと、長い髪がするりと滑り落ちた。私は唖然として声が出ない。
「あなたに出会うために性別を偽り、あの学校へ潜入しました」
実はこの声も裏声です、というと、地声なのか低い声に切り替わった。
「でも、なぜそこまで？」
「あなたの幼馴染みに聞いてみるといいですよ」
政巳が視線を向けた先には、私の幼馴染み――吉次郎がいた。なぜいるのかと問えば、私たちの後をつけてきたらしい。
政巳が言うことも、吉次郎がつけてきた訳も何一つわからない。ただ、政巳が探し求めていた愛しい人ということと、自分の前世がかの市姫であるということだけはわかった。でもそれだけで、それ以上のことはいくら記憶をかき集めても形を成すことはなかった。
「市子、帰ろう」
吉次郎は無理やり私の手をつかんでその場を去った。政巳は追いかけることはせず、こちらを見るばかりだった。

02.

「いいかげん、放してよ」
思いっきり腕を振ったら、いとも容易く手が外れた。そのときの吉次郎の顔はひどく傷ついたようだった。政巳が言ったことはどういうわけか尋ねてみると、簡単に答えが返ってきた。
「あいつの前世は浅井長政。前世の市子、お市様の最初の夫。俺は」
そこまで言うと、吉次郎はすごく言いにくそうな表情になった。その先は聞きたいような聞いてはいけないような、そんな気がしたが、私はじっと語られるのを待った。
「俺は秀吉。皆から『猿、猿』と呼ばれてきた男。天下を獲った男。――そして、生涯お市様に嫌われ続けた男」
私は何も言えなかった。何も言わなかった。前世の自分が為したことは信じられないようで、妙に納得ができた。吉次郎は続けた。
「何の因果か俺は市子の幼馴染みで、市子は前世の記憶を持ってないみたいだったから、今回はこの恋が許されるのかと思ったが、長政が市子と出会ってしまったことで今までの努力も無駄だったかな」
「そんなことないよ」
気がついたらそういっていた。
「たぶん」
この時点からちょっと気になり始めていた。
「ほんとに？」
「私が嘘、つけると思う？」
それもそうかと吉次郎は笑った。
そのまま、二人黙ったままで、帰路に着いた。

次の日からは何事もなかったかのように毎朝、変わらず吉次郎が迎えに来て、学校へ着くと、政巳が待ち構えていて、吉次郎と政巳

の視線が鋭かった気がしたけど、気にしないことにした。とりあえず、政巳とは普通に接することにした。

ある日、吉次郎がバイトで、政巳が用があると言って先に帰ってしまい、私は一人で帰ることになった。

話し相手もいないので、家までがいつもより遠く感じる。すると、数人の他校の女子生徒が声をかけてきた。私は彼女たちに見覚えがあった。

「ちょっといい？」

おそらく、逃げられないだろうと踏んだ私は大人しくついていった。行き先は人目もつかない、廃墟となった工場だった。

「私たち、吉次郎にいきなり別れようって言われたの。お互い、今までの関係で満足してたのに。理由を聞いても教えてくれないし、あなた何か知らない？　幼馴染みなんでしょう」

「知らない」

彼女と別れてたことすら私は知らなかった。思い当たる節があるはずがなかった。

「とぼけないで。どうせあなたが原因なんでしょう。吉次郎はいつも私たちよりあなたを優先させてたみたいだし」

彼女たちが言っていることが理解できないので、私はため息が出た。彼女たちのうちのリーダー格っぽいのが、私の前へ出てきて、思いっきり私の頬をひっぱたいた。突然すぎて、痛みだけが頬に残る。手で触れると血がついていた。爪でひっかかったようだ。

「イイザマね。自分が吉次郎に合うとでも思ってるの？」

リーダー格は偉そうにそう言った。

「吉次郎のことが好きなの？」

私がそう尋ねると、リーダー格は顔を歪ませて、私を突き飛ばした。

「バカなこと言わないで。そんなのじゃないわ。あなた目障りなの

よ」
リーダー格の腰巾着が私を取り囲んだ。これはダメかもしれないと諦めかけたとき、誰かが入ってきた。
「女のいじめは無様ですよ」
ちゃんと男の格好をした政巳だった。政巳は平然と入ってきて、私の顔にできた傷を見るなり、顔をしかめた。
「すみません。こんな傷を作らせてしまって」
「いいよ、来てくれたし」
政巳は吉次郎の元カノたちに向き直ると、こう言った。
「このことをバラされたくなければ、今すぐ立ち去れ」
元カノたちはすぐさま退散し、この場には私と政巳だけになった。
「市子さん、私は前世からの運命などとは関係なく、私を見てほしい。確かに私も初めは市姫であるということだけでしかあなたを見ていませんでした。しかし、あなたとふれあう度に、あなたの魅力に惹き付けられていました。どうか、私のことを見てくれませんか？」
答えなどそう簡単に出せるはずがなかった。この間の吉次郎のことを考えると、はっきりと答えを導き出すことは容易ではない。だからといって、答えを先送りにすることもできない。
そもそも吉次郎も政巳も私を相手にしている時点で気は確かかと疑いたくもある。私よりも元カノたちは可愛かった。自分を磨いてすらない私よりも断然に。
「どうして私なの？　どうして他の子ではないの？　私のどこに魅力があるの？」
あなたたちがここまで私に執着する理由は何？
……何一つわからない。

話はうやむやのまま、私は家まで政巳に送ってもらった。ちょうど、ばったり吉次郎と会ってしまった。吉次郎は私の頬の傷を見つ

けると、政巳に対しひどく冷たい視線を向けた。
「どういうことなんだ？　なんで、市子が怪我してんの」
今まで聞いたこともないような低い声でそう言って、政巳の胸ぐらをつかんだ。政巳は黙ったままで吉次郎を睨み付けている。しばらく、お互いに微動だにしない。しびれを切らしたのは私の方で、この場の空気に耐えられなかった。
「ちょっと、二人とも止めて。吉次郎、この傷は政巳のせいじゃない。むしろ、政巳は助けてくれたの」
吉次郎は未だ信じることができないようで、しぶしぶ政巳から手を離した。
「で、どういうことなんだ？」
再び尋ねられ、上手く言葉にならない。そんな私を見かねて政巳が言った。
「あなたの元カノのせいですよ。あなたに別れを告げられた理由を市子さんのせいにして」
信じれないといった顔を見せ、同時に落ち込んだようだった。私の顔を見ていたが、何と言ってよいのかわからず、曖昧に笑って誤魔化すしかなかった。
「自分がきちんと後始末をしておかないから、大切な人を傷つける。もっと頭の回る人間だと思っていましたが、どうも見当違いだったようですね」
吉次郎はそのまま黙ってうつむいていた。私は強制的に家へ帰され、その後、何が起こったのかよくわからない。

次の日から私は学校を休んだ。熱が出たからだ。意識が朦朧として、まともに歩くことすらままならない。　父が仕事を午前中だけ休み、私を病院につれていったが、原因がわからないということで、そのまま入院することになった。

03.

運がよかったのか悪かったのか、二人部屋のベッドの一つが空いていたということで、そこに入ることが出来た。同じ部屋になる人も、私とそんなに年が離れていないようだった。

入院して何週間はとてもじゃないけど、口が利けるような状態じゃなかった。熱も下がったり、上がったり、声がかすれて全く喋れなかったり、倦怠感のせいで食事も取れなかったりと散々だった。

この頃から睡眠時間が長くなったということもあるだろうが、夢をよく見るようになった。市姫の記憶と思われた。幼い頃から、兄・信長のこと、秀吉や長政様、子供たち、勝家殿、最期のときのことまで全て見た。

とはいえ、今の私にはほとんど関係ないと思ってる。確かに吉次郎のことや政巳のことは前世からの因果だと思うが、私にとってはあまり関心ないことだ。市姫がなんと思おうとも関係ない。

体調もだいぶ落ち着いた頃、ふと相部屋の人の方を見ると、向こうもこちらの視線に気付いたのか、わざわざベッドから降りて近づいてきた。私のベッドの近くにあった椅子に腰掛けると、にこっと笑った。同性なのに少しドキッとしてしまった。そんな魅力的な女の子だ。

「初めまして。私、小峯美衣子（こみねみいこ）。えっと、尾塚（おづか）市子さんでいいよね。いつ目を覚ますのかとても楽しみにしていたの。同室の人で初めて同い年くらいだったから、特にお話したいなって思ってたの」

こっちはあなたの笑顔にやられそうになりましたが……。

それはさておき、話をしてみると美衣子ちゃんは2歳上だった。”美衣子さん”とも呼ぼうとしたけど、拒否された。敬語の使用も

拒否された。でもわかったこともたくさんある。
まず、弟さんがいること。私と同い年らしい。勉強も運動もできて、自慢の弟らしい。一人っ子の私からするととってもうらやましい。そういえば、政巳もお姉さんがいるって言ってたような言ってなかったような……。だめだ、思い出せない。とにかく、入院生活は退屈なものにはなりそうもない、ということだけは確かだった。

次の日、吉次郎が見舞いに来た。美衣子ちゃんはちょうど検査かなんかでいなかった。
「吉次郎、来てくれてありがとう。わざわざよかったのに」
「馬鹿いうな。こっちは心配したんだぞ。政巳はまだ来てないのか？」
「うん。でもね、休んでる分のノート見せてくれるって」
たぶん、今日明日には来るだろう。
「みんなして心配しすぎ。お母さんなんて私が目を覚ましたら、大人気なく泣くし、クラスメイトもどこで聞きつけたのかメールボックスが大変なことになってびっくりしたよ」
吉次郎は苦笑するだけだった。きっと私が思いもよらぬドラマがあったに違いない。そう思うと、ちょっと同情せずに入られなかった。

吉次郎が帰ったあと、ちょうど美衣子ちゃんが戻ってきた。でも、誰かと話している。声からして男だ。弟くんかなと思った。仲良さげでうらやましいってちょっとだけ思う。
のんきにしていると美衣子ちゃんが声をかけてきた。
「市子ちゃん、起きてる？　弟が来てるから会ってくれない？」

カーテンから少し覗いて美衣子ちゃんがにこりと笑った。私としてはよかったので、もちろん、了承した。
美衣子ちゃんがふわふわ系の子だから、やはり似ているんだろうか。気になって仕方がない。おまちかねの相手が目の前に現れた瞬間、私はあ、と声を漏らした。そう、相手は顔見知り。私のクラスメイトである小峯政巳だった。
「市子さん、姉の同室者ってあなたのことだったんですね」
話を聞いてみると、政巳は私の病室どころか病院を教えてもらえなかったようだ。どうせ吉次郎のせいに違いない。彼にも困ったものだ。
「あら、二人ともお知り合い？　政巳の好きな人って」
そこで美衣子ちゃんの話が途切れた。政巳が口を手で塞いだからだ。
「余計なことしないでください。まだ時間が必要なんです」
割りと小声で言っていたが、私の耳には届いていた。本人もそれがわかっているのか、こちらの様子をうかがっていた。
「美衣子ちゃん、ちょっといいですか？　政巳はここにいてね」
空気に耐えられなくて、美衣子ちゃんを連れて部屋を出た。少し行ったところで立ち止まると、美衣子ちゃんの肩をしっかりつかんでまっすぐ目を見た。
「実は政巳には一度、告白されていまして」
「まあ素敵！　市子ちゃんが妹なんて」
「話最後まで聞いてください」
やや暴走し始めた美衣子ちゃんを制して、話を続けた。
「だけど、幼馴染みからも同じように言われてて、悩んでる最中なのです」
美衣子ちゃんは優しく笑うと私を抱きしめた。「大丈夫」って言って私の背中をなでた。
「今すぐ答え出せないなら出さなくてもいいのよ。二人とも待ってくれると思うわ。選べないほどどっちも魅力的ってことでしょう」

何でもお見通しみたいだ。お姉さんって越えられない何かがあるようだ。

「このまま戻るのも面白くないから、お散歩しよう」

私は手を引かれるままついていった。

０４．（前書き）

遅くなりました。すみません。短めです。

04.

美衣子ちゃんは私を中庭に連れ出した。そしてある一点――ある一人の男性を眺めていた。

「あそこの彼ね、野球が大好きで、毎日練習してたんだって」

そう言う美衣子ちゃんの視線は熱かった。

「でもね、小さな男の子かばってトラックにひかれて……車椅子生活になったんだって」

自分のことのように辛そうな表情を浮かべる美衣子ちゃんからは彼が好きだって気持ちが溢れていた。

「美衣子ちゃん、彼とは？」

「この前、詩を書いてたら窓から飛んでっちゃって、彼が拾ってくれたの。一目惚れだった」

一途に人を想えるなんて私とは違う。でも、美衣子ちゃんの表情（かお）には喜びばかりではなかった。

「彼は彼女がいるの。私とは違って病気もない、健康的に焼けた肌で、まるで向日葵みたいな。いつも励まして、毎日お見舞いに来るのよ」

だから、私は眺めるだけ。道端の小さな花ほどにしかなれないのよ。頑張って咲いても見つけてもらえない。美衣子ちゃんはそう言って彼から視線を外し、また私を引っ張ってどこかへ連れていく。ふと美衣子ちゃんの想い人を見ると、彼はこちらを見ていた。というより、美衣子ちゃんを見ていた。

「人の恋心ってよくわかんないよね」

私は何も言えなかった。難しくて何もわからなかった。

部屋に戻ると政巳が本を読んでいた。タイトルはよくわかんない。フランス語っぽかったけど、生憎、フランス語は読めない。

「ただいま」

美衣子ちゃんはいつもと変わらぬ様子で言う。政巳は何か気づいてそうだったけど、何も言わなかった。代わりにボードゲームを取り出した。
「白黒（リバーシ）しませんか？」
白黒は苦手なので、美衣子ちゃんと政巳がするのを見てることにした。初めは美衣子ちゃんが勝ってたけど、政巳はすぐに巻き返し、結局、圧倒的勝利だった。
「手加減ってものを知りなさいよ。将棋でも囲碁でもチェスでも、絶対に勝たせてくれないのよ」
美衣子ちゃんはそうは言うものの楽しそうだった。
「トランプなら私もできます」
私は持ち物からトランプを取り出して机に置いた。
「ババ抜きしよう」
ババ抜きには自信がある。大抵、ババを引くことはない。引いても、すぐに相手が取るので、今まで負けなしだ。
ったはずだった。なぜかこの姉弟きょうだい強い。私は五回くらい挑んだけど負けた。グルなんじゃないかとも思ったが、そんなことするような人じゃないことはわかっていたため仕方なく敗けを認めた。
「うぅ、勝てない」
恨めしそうに二人を見ると、笑われた。恥ずかしくなってうつむく。
「政巳、そんな意地悪してたら市子ちゃんに嫌われちゃうわよ」
政巳はこっちを見たが、私がつんとそっぽを向くと慌てたのがわかった。
「プリンでも買ってきます」
政巳は急いで売店に向かった。
「美衣子ちゃん、政巳、プリン買いに行きましたけど」
「いいの、いいの。市子ちゃんには甘いから。甘えちゃいましょう」
姉は強いらしい。すごいなぁとただただ思うしかない。

そう経たないうちに政巳は帰ってきた。嬉しいと少し大袈裟にリアクションしたら、政巳はほっとしたようだった。美衣子ちゃんは笑みを浮かべてこっちを見ていて、明らかに面白がっていた。

０５．（前書き）

短めです。

05.

その後、私は順調に回復し、退院することができた。
「今日で市子ちゃん退院かぁ。別れるの寂しい」
「また、政巳と一緒にお見舞いに来ます」
「あら、次会うときには二人が付き合ってたらいいのにね」
「姉さんっ」
慌てたようにいう政巳は顔が赤かったように思われた。私も苦笑いして誤魔化すしかなかった。

学校ではクラスメイトが心配の言葉をかけてくれたが、正直、騒がしくて私は好きじゃなかった。皆には心の中で謝った。
政巳は学校を今月いっぱいでやめるそうだ。突然の事で驚いた。理由はよくわからないけど、ドイツへ行くらしい。美衣子ちゃんの手術のためだそうだ。美衣子ちゃんは片想いの相手と別れなきゃいけないのかと思うと悲しい。
「今日、お見舞いに行きたいんだけど」
今月もあと二週間。美衣子ちゃんと会えるのも数が限られてる。
「えぇ、いいですよ。今日は検査もなかったはずです。姉も喜ぶと思いますから、一緒に行きますか？」
「本当？　ありがとう」
自分のこともちゃんとできないのに人の心配するのはおかしいかもしれないけど、やっぱり応援してあげたいのが友達だと思う。
放課後、お見舞いついでに美味しいプリンを買って行くことにした。もちろん、政巳はきちんと着替えてだけど。美衣子ちゃんは何の病気なのかよくわからない。聞いてはいけないことのようだったし、尋ねる気にもなれなかった。
「わあ、市子ちゃん来てくれて嬉しい」

美衣子ちゃんにハグされて、為すがままになる。
「美衣子ちゃん、プリン、持ってきた」
プリンを見ると、また歓声を上げた。
「私、売店のはもう飽き飽きしてたの。ありがとう」
どうやらプリンは大好物らしい。だから、入院していたとき、政巳はプリンを買ったのか。なるほど、姉思いのいい人だ。
「今日はね、美衣子ちゃんに話があってきたの」
「何かしら？　政巳はどっか行ってて」
何の話をするかはだいたい検討がついたようだ。政巳は仲間はずれにされて寂しいのか、姉が何か余計なことを言わないか心配なのか、この場を離れるのがひどく不服そうだった。

「彼ね、彼女と別れたんだって。で、こう言ったの。『ずっと君のことを見てた』って」
見てるだけだった美衣子ちゃんがまさか、彼と話したなんて結構な進歩だと思う。でも、『ずっと君のことを見てた』っていうことは、どういうこと？　やっぱりわからない。最近はわからないことが多くて頭がパンクしそうだ。
「別れた原因って？」
「そう、私のせい。すごく嬉しかったけど、でも、喜んだ自分に嫌気が差すっていうか。彼女に申し訳ない気がするの」
「違うよ」
気がついたら、叫んでいた。慌てて口を押さえて、声を抑える。
「美衣子ちゃんは悪くない。むしろ、気持ちが離れてたのに付き合ってた彼のが悪い。で？　彼は何て」
「あまり彼を悪く言わないで。彼には『付き合ってください』って言われちゃった。でも、どうしていいかわからなくて逃げちゃったの」
確かに美衣子ちゃんは今月末にはこの病院を去ってしまうし、今の心境じゃ、返事をするのは難しいかもしれない。

「彼は待ってると思う」
だって、それぐらいの気持ちがなきゃ、彼女と別れてだなんて、
できないんじゃないかと思う。
「市子ちゃん、私、頑張るから。彼のこと、避けちゃわないように」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7614u/

市姫転生譚

2011年9月28日19時07分発行